

# 令和元年度福祉教育推進セミナー概要

茨城県社会福祉協議会

令和元年度福祉教育推進セミナーを、10月30日（水）に茨城県市町村会館で開催しました。台風19号の災害の影響などで、参加者が少なかったですが、日本福祉大学の野尻紀恵先生の講演や、茨城キリスト教大学の池田幸也先生のコーディネートによるシンポジウムで、茨城県内の福祉教育の課題や地域共生社会に向けた取組等について参加者全員で認識を新たにしました。野尻先生の講演や事例発表の趣旨等については、次のとおりです。

## ○基調講演 日本福祉大学社会福祉学部 教授 野尻 紀恵先生



- ・日本福祉大学で、スクールソーシャルワーカー（SSW）の育成を担当している。
- ・エンパワーメントが今日のキーワードである。社会福祉・ソーシャルワークの用語であり、人と人とが交流し、その関係の中で自らの力を向上させることができる、この過程・プロセスをエンパワーメントとっている。
- ・日本は、2000年代より地域福祉へシフトチェンジをしており、地域の中で見守り助け合って暮らしていく仕組みが整備されつつある。しかし、実際の地域は、簡単なものではなく、問題や事件・事故が起きている。私たちは、地域共生社会の中でネットワークを作り、ケアの仕組みを作り、発生する課題を丸ごとすくいあげる企画やプログラムを作り、地域を育てていかなければならない。
- ・地域共生社会を実現するには、地域に住んでいる人々がお互いに知り合い、お互いに学び合うことが大切。住民の参加が必要であり、ここに福祉教育の存在意義がある。
- ・広島避難所で、子ども達からの何気ない提案で、避難所が活性化した事例がある。地域共生社会をつくるには、支援する人、される人の垣根を超え、弱くてもお互いが助け合うことが大切である。地域福祉のためには福祉教育が大切である一例である。
- ・学習指導要領が改訂され、生きる力の育成には家庭の協力が求められている。しかし、家庭環境に恵まれている子ども達ばかりではないので、家庭が駄目ならば地域で子ども達を育てていくことが必要である。さらに、多様な価値観を磨くには、学校ばかりではなく、地域社会のいろいろな人が子どもの育成に関係すべきである。例えば、2021年度から、高齢者の学習が中学校の家庭科に入る。高齢者体験等から学習がスタートすると思うが、社協が学校へ入り、地域の高齢者との交流体験などのプログラムを提供すれば、子ども達の力もあがり、高齢者も楽しく過ごす社会の実現に近づくであろう。
- ・私が実施しているSSWでは、支援している高校生から社会なんて信用しないとの声を聞く。高校生であるにもかかわらず自分で授業料を払い、親にお金を渡している高校生がいる。家庭環境を変えるのは大変難しいが、それでも子ども達は多様な人々の交流で、エンパワーメントが起これり、育っていく事例がある。やはり、人を育てるのが福祉教育だと確認できる。
- ・福祉教育の定義（2005年全社協）は、「社会福祉について協同で学びあい、地域における共生の文化を創造する総合的な活動である。」としている。共に生きることが文化になるまで福祉教育の役割がある。共に生きる社会は提唱されたとしても簡単ではなく、福祉教育を大切に共生を文化にする道のりが続いている。

### ・3つの例示

#### ・中学生セーフティネット

熊本県合志市の中学校の取組で、認知症サポート研修を実施し、オレンジリングを渡しているが、その意味がよくわからないまま終了することが多い。そこで、研修後に介護体験のある方のお話と、中学生が何ができるかをエコマップの作成を通して考えることを実施した。介護体験での話では、オレンジリングを必ず身に付けておくことで、支援を頼みやすくなるとの実際の体験者から話を聞くことで、オレンジリングの意味がわかったようだ。さらに、この人の事例をもとにして、エコマップづくりを中学生が行い、生き生きとした活動が見られ、認知症への理解が進んだとのこと。

## ・ふぁみりー基地（子ども食堂）

日本福祉大学のある地域で、私とゼミ生が中心となって立ち上げた。SSWの教員とのことで、不登校の中学生が来ている。その中で、いつもフードをかぶり壁しか見ない中学生が、いつのまにかフードを脱ぎ、会話に加わるようになった。しかも、年下の子どもの世話をするようにまでなった。子ども食堂立上げを慣れない学生がやり、さまざまなトラブルに遭うことで、その解決策をみんなで考え、みんなで行ったことで居場所としてエンパワーメントが起こっていたからだと思う。

## ・赤ちゃんだっこ

両親が居ないため祖母に面倒をみてもらっていた中学生が学校へ来なくなってしまった。探し出して理由を聞くと、祖母に恋人ができたため家を追い出されたとのことであった。学校なんて、幸せな子が行くところで、そんな所へなんか行けないとのことだった。以前、保育士になりたいと言っていたので、赤ちゃんだっこの時に是非参加させたいと担任の先生が一生懸命連絡をとったところ、学校へ来た。赤ちゃんをだっこをしながら、何か感じ、エンパワーメントが起こったようだ。感想文に、「赤ちゃんも生きていることがわかった。私が抱っこがへたなので、セーラー服の襟を掴んでいた。私もやり直してみようかな。」と正直な気持ちが書いてあった。担任や先生方が校長先生にお願いして、別室登校を勧めたところ登校してくるようになり、無事中学校を卒業した。働きながら定時制の高校へ通い、保育士になるための専門学校目指して頑張っている。

## ○事例発表

### ①コミュニティスクールの取組について 高萩市教育委員会 佐藤みゆき氏

- ・本市では、2020年の全校指定に向けて取り組んでいる。
- ・秋山小・中学区では、2018年度から先行して次の事例等に取り組んでいる。
  - ・防災訓練 ・小学1年の見守り ・保健室での看護支援
  - ・読み聞かせ・ミニコンサートなど



### ②高齢者施設との交流について 古河市立八俣小学校 山下尚美氏

- ・5年生の総合的な学習の時間において福祉体験を実施している。
- ・学区内にある特別老人ホームとの交流活動を複数回行い、児童や老人ホーム入所者の意識の変容がみられた。
- ・また、老人ホーム入所者を学校へ呼ぶ活動も実施し、交流の深化を図っている。

### ③チャレンジ ボランティアスクール2019 笠間市社会福祉協議会 海老澤清美氏

- ・本協議会では、平成24年～27年まで復興ボランティア活動を宮城県において実施してきた。事情により派遣を3年間中止したが、令和元年度再び地域の大学生・高校生・中学生を対象に復興ボランティア活動を実施した。
- ・内容は、宮城県石巻市大川小学校で語り部の方からのお話を聞いたり、花壇等の整備のボランティア活動を行った。
- ・今後も、復興ボランティア活動を通して、相手の立場になって思いやりの心を築く活動を継続したい。

## ○野尻先生からの助言

- ・コミュニティスクールの取組は素晴らしい。ぜひ、全国へ紹介したい。高萩市は、防災訓練、読み聞かせ、保健室支援等実際の活動をしていることが素晴らしい。また、地域コーディネーターについては、地域が様々であり複雑なことから、いろいろな人々とのネットワークを作ることがポイントだと思う。
- ・高齢者施設との交流では、施設訪問ばかりでなく、話題の中から高齢者が母校の学校を訪問したいとの要望に応え、学校探検を実施しているのが素晴らしい。子ども達の思い、高齢者の思い、関係者の思い等を考慮して優先順位をつけてプログラムを展開したい。
- ・笠間市社協の取組はチャレンジングですごい。ただ、様々な被災地に関して様々な意見があることから、ぜひ、実施後のリフレクションをお願いしたい。